

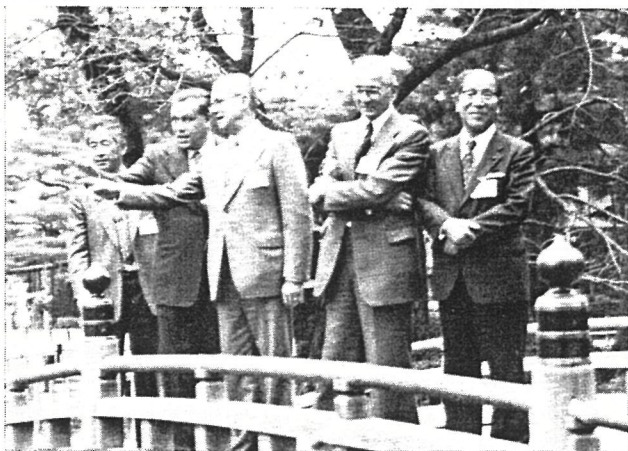


国際親善ニュース

第 4 号

昭和53年5月1日発行
金沢市都市提携委員会
事務局：金沢市総務部総務課
国際親善係 TEL 20-2075

гент市長来訪



○гент市長来訪 = 写真左

昨年11月8日、姉妹都市гентから1月に市長に就任したばかりのプレサイ・ドウ・ペープ市長とマルセル・ターネン補佐官が本市を公式訪問した。一行は、8日、午前9時過ぎに小松空港入りし、そのあと市役所を表敬訪問したが、岡市長が公務不在中のため代わって江川助役が中村提携委員会々長、徳田前市長らと出迎えた。一行に九谷焼の飾り皿等が贈られたのに対し、本市へ額入りの大きな絵と市旗が贈られ、なごやかに歓談し両市の友好を温め合った。そのあと中西県知事を訪問するとともに、兼六園、奥卯辰山ベルギー庭園などを見学し、卯辰山で松を記念植樹するなどし、「古都の秋」を楽しんだ。2日目は武家屋敷、加賀友禅、九谷焼工場などを見学。又、藤間勘寿々さん宅を訪れ日本舞踊を觀賞し金沢の古い歴史と伝統・文化に強い関心を示した。晩には市民歓迎パーティが開かれ市民との友好・親善をも深め、翌10日、午前10時過ぎに離沢した。

(写真は、助役の案内で兼六園を見物するгент市長一行。)

○経済代表団がイルクーツク親善訪問 = 写真右

サラツキー市長からの招請によりイルクーツク州との経済交流促進を話し合うため石川県訪ソ友好経済代表団が昨年11月18日から25日までイルクーツク州を訪問した。一行は、上田県商工労働部長を団長とし、西村市経済部長、北岸金沢商工会議所常務理事、池田日ソ貿易協同組合代表理事ら8人で、滞在中、ソコロフ州知事、サラツキー市長その他貿易関係者と貿易問題について話し合った。この中で、日本の港とシベリアの各港を定期貨物船で結ぶシベリア・ランド・ブリッジ構想の受入港として金沢港を考えて欲しいと提案し、基本的賛成を得た。又、双方の輸出入品目については、全体的に両国間のバーター貿易を基調に、今後更に話を詰めて行くことで意見が一致した。又、今年6月にイルクーツク市で開かれる機械展示会に本県の工作機械等を出展するよう要望が出され、今後、県内の業界と話し合い検討することで合意した。なお、一行は、市内観光、レセプション等の温かい歓待を受けた。(写真は、サラツキー市長と話し合う一行。)



○金沢・パファロ提携15周年記念通話 = 写真左

1月24日、姉妹都市パファロとの提携15周年を記念し、KDD国際電信電話の協力により、国際記念通話が行われた。通話者は、本市側が岡市長、中村提携委員会々長、油谷同委員会名誉会長、吉田北陸放送制作部長、留学生のカーウイさんとバランスキー君。パファロ側は、新市長に就任したばかりのグリフィン市長、フランク元姉妹都市委員会々長、ハッスンWIVBテレビ放送局長、パファロ留学中の森岡君と瀬戸君で、関係者約30人が見守る中、まず岡市長が、「パファロが厳しい寒気に見舞われ心配している。日米間に経済紛争が生じてはいるが、こうした時こそ我々の友情と理解で解決しましょう。」とメッセージを送った。これに対しグリフィン市長から「2年続きで寒気に襲われ、狭い道路の除雪に困っており、何か名案はないものではないでしょうか。」などとユーモア溢れるメッセージがあり、そのあと通話者が順次、交替したが、1時間あまりの「声の交歓」は大きな成功を収め、両市間の友情が深められた。(写真は、通話する岡市長)



深まる友情の交歓

○県音楽文化協会ゲント親善公演

石川県音楽文化協会の「金沢の翼」一行150名は、3月1日から翌2日にかけて姉妹都市ゲントを訪問し、親善公演を行った。一行は、伊東平俊県教育委員会委員を団長とし、2月22日、日航特別



機で小松空港を出発し、ウィーンに約1週間滞在。26日、有名なムジク・フェラインの大ホールでオーストリアで一流のアマチュア楽団、アカデミッシュ・オルケスタフェラインと合同公演した。

3月1日、午後4時過ぎにゲント（ベルギー）入りした一行は、警察の白バイによって特別に先導され市内観光の案内を受け、又、一行のため盛大な歓迎セレブションが開かれるなどその歓待は、大変温かく丁寧なものであった。同日、晩8時半からゲントでも大変由緒あるロイヤル・タッチ劇場で公演が行われ、ベートーベンの「莊厳ミサ曲」から始まった歌の数々は、ペープ市長、モーロウ助役を始めとする約500人の市民をすっかり魅了した。又、琴と尺八による日本の神秘的な楽器の演奏に聴衆は、強い興味と関心をもって聞き入った。アンコールで大阪のプロ・ムジカ・インスティテュートの協力で教わった「私の愛するフランダース」を原語で歌ったところ、場内は総立ちとなり、盛大な拍手が鳴り止まず、一行のゲント親善公演は、大きな成功を収めた。又、同じ建物内で生け花、書道の実技も披露され、訪れる市民は、その見事な芸に見とれていた。公演が終わってもしばらく聴衆は立ち去らず、会場は、温かい友情の交歓に包まれた。（写真は、ペープ市長らの歓迎を受ける一行）

○C・ライト前バファロ商業会議所会頭専務理事が来訪

バファロ商業会議所のチャールズ・ライト前会頭専務理事が1月4日から7日まで本市を訪問し、親善を深めた。同氏は、長い間、金沢・バファロ両姉妹都市間の友好促進に貢献してきたが、1月



1日付けで退職し、旅行代理店のチーフに就任したばかり。5日、市役所を表敬訪問したが、あいにく市長は、公務不在中で江川助役が出迎えた。ライト氏は、これで4度目の来訪で、今回は特に金沢の雪景色を見たいということだったが、雪は全然降っておらず残念そうだった。それでも旧知の助役と会えてうれしい様子であった。旅行社を始めた関係もあって、本市内の学生グループを夏休み期間中、バファロ市内の大学寮に受け入れ、夏期セミナーに参加する旅行プランを提案。本市ではさつそく関係者と会って検討してもらった。そのあと金沢商工会議所を訪ねたが、小川副会頭、樋田専務理事、福光経済同友会代表幹事が出迎え、親しく懇談し旧交を温めた。日米間の経済紛争なども話題になり、ライト氏は、「アメリカの鉄鋼業界の不振は、近代化の立ち後れ、公害防止への過剰な設備投資などが原因」と述べ注目された。又、北国新聞社をも訪問し宮下社長にバファロ・イブニングニュース社との提携を提案。これに対し同社長は、実現に向け前向きに検討したいと話した。ライト氏は、7日夕、小松空港から帰国の途についた。（写真は、市役所を訪れたライト氏）

○東南アジア留学生に陳君が決まる

今年度の本市東南アジア留学生受入制度適用者にマレーシアの陳君（ティン・シー・リオン：20才）が決まった。陳君は、1年前に来日し東京の国際学友会日本語学校で勉強し、今春、金沢大学工学部電子工学科を受験し見事合格した。4月5日、市役所を訪れた際、岡市長からお祝いと激励の言葉を受け、「しっかりと頑張ります。」と力強く答え、うれしさを隠しきれない様子だった。本市は、今後4年間、毎月6万円支給する。



この制度は、同じアジアの一員として東南アジア諸国との連帯を基調に、本市在住の優秀な東南アジアの学生を育成するため昭和48年に発足したもので、これまで4名が適用されたが、現在、インドネシアのアリフ君が金沢大学法文学部に在籍中である。（写真は、市長と握手する陳君）

○州立バファロ大学のカーウィ博士が来訪

州立バファロ大学学長特別補佐カイリー・カーウィ博士が1月5日に市役所を訪問。同博士は、2年前にも来訪したことがあり、その時、岡市長がバファロ・シンフォニー・オーケストラを本市へ招きたいと要望したのに対し、バファロ大学のロウ絃楽四重奏団ではどうかと答えたが、帰国後、さつそくバファロの関係者とこの話を検討し、今回の訪問となった。滞在中の話し合いで、同四重奏団を受け入れることで基本的合意に達した。同博士の帰国後、秋の金沢市芸術祭の時期に本市が渡航費等を負担することを条件に同四重奏団を招請する用意があることを正式に伝え、これによって今秋、金沢での公演が実現する見通し。



ロウ絃楽四重奏団は、日本では無名に近いが、現地ではニューヨーク州のみならずアメリカ本国でもかなり有名で、オーストラリア等でも公演しており、メルボルン・ヘラルド紙は、「その滑らかで鋭敏で、すばらしくリズムカルな演奏に、幸せな驚きを感じた」と評している程である。（写真は、ロウ絃楽四重奏団のメンバー）

○ポリヤンスキー駐日ソ連大使夫妻が来訪

昨年11月24日から27日までポリヤンスキー駐日ソ連大使がポリヤンスカヤ夫人と本県を訪れた。一行の来訪は、日ソ協会石川県連20周年を記念しての同協会の招きと北国政経懇話会に出席するためで、25日、午前9時に市役所に岡市長を表敬訪問し、30分程なごやかに歓談した。大使からソ連の民族楽器バラライカが、市長からは洋服地帯が贈られた。森日ソ協会県連会長の案内で県庁、商工会議所、金沢大学、野田山口シリア人墓地、近江町市場、兼六園等を訪れた。兼六園では好天に恵まれ、紅葉したもみじに見とれ、「ハラショー（すばらしい）」を繰り返し、又、夕顔亭の茶室などにも強い関心を示した。晩には、歓迎パーティが盛大に開かれ、日ソ両国間の友好・親善が深められた。又、26日、午前中は根上町を訪れ、浜小学校などを見学し、児童と腕を組んだり、気軽に話かけるなど子ほんのうな一面をも見せた。27日、午前小松空港から帰京した。



（写真は、市長とプレゼント交換する大使夫妻）

家庭滞在の楽しみ

市内寺町在住 石田 藤子



第一回姉妹都市親善訪問団に参加し、パファロを訪ねた時、市当局、市民ともに唯の外国人としてではなく、特に受入家庭では旧知の友の様に家庭を開放し、思っても見なかった程暖かく迎えて下さった事は、生涯忘れ得ぬ思い出です。初めて訪れる異国の地に、待っている人がいてくれると云う事は、心強く何かしらホッとする様で旅の喜びもひとしおです。その喜びを金沢を訪れる人達にも味わっていただきたいと思い、受け入れをする様になりました。

ナンシーからの或る御夫婦は、私達にとっては初めてのフランス人で戸惑いもありましたが、日本家庭に大変興味がある様で、すぐに台所を手伝ってくれました。割烹着を貸してあげ、私は、エプロンのポケットに辞書を入れ、辞書をくり乍ら発音が悪くて言葉が通じない時は指でさし、何とか解ってくれてニッコリ。すっかり打ち解けて、彼女にはフランス料理を教えて貰いました。トマトの中に引肉を詰め、オープンで焼く。本では見た事がありましたが、実際に作ってみるのは初めて。思いがけなくフランスの家庭料理を味わう事が出来、賑やかな夕食でした。或時は一緒にのり巻きを作ったり。御飯の上に具を並べ、巻き上がった時の彼女の嬉しそうな顔は忘れられません。着物を着て床の間を背に座布団の上にキチンと座り写真を撮ったり。それにしても女性の場合、自分の好みの色の着物を着た時の嬉しそうな顔は何れの国も同じだと思いました。夜には家族と時間の経つのも忘れて語り合う事もあります。異国のムードが流れることは我が家に新風の吹き込む思いがします。彼等はよく日本の事を勉強して来ていると申しましようか、私共の方が改めて日本の事柄を見直す時もあります。こうして旅行しなくとも外国の空気に触れたり、居乍らにしてその国の生活の一部を知る事が出来るのは大きな楽しみです。こうした触れ合いは決して観光旅行では味わえないものです。突然の出会いから家族ぐるみの交際に発展した間柄の人達も多く、こうした人々との交流は何時迄も大切にして、更に輪を広げたいと思います。今は子供に頼っている言葉の問題もやがては頼りに出来なくなると思い、何時の日か役に立つだろうことを夢見乍ら勉強もしています。言葉や習慣の違う欧米の人々とお友達になれましたのも、姉妹都市提携のお蔭だと思えます。多くの人達と交流し、理解し合える現在の平和な時代を心から喜んで居ります。

ナンシー便り

第3回ナンシー派遣留学生 村田 真樹



ナンシーの春は突然やって来た。或日、ふと気付くと公園の芝生のあちこちに小さな白い花が顔を出し、柳の芽が今にもはじけそうにふくらんでいた。4月2日に生活時間が夏時間に切り替えられ1日が夜の方に1時間移行した。午後8時で未だ明るく9時になってやっと夜になる。市の中央に位置するスタニスラス広場に面したカフェは店の前にテーブルとイスを並べ、道行く人々を眺めながらコーヒーを楽しむ風景が見られるようになった。クール・レオポルド広場には、移動遊園地が開かれ、子供達の歓声、若者達の陽気な笑い、呼び込みの声、賑やかな音楽が響き渡る。そんな事が一度期にどつと訪れ、季節のチャンネルは、冬から春へと切り替わった。

学生達は、バック（復活祭）の休暇のため、続々と駅へ向かう。リュックを背負って旅に出る者、トランクを片手に帰着する者。僕

が居る学生寮も閑散としてしまう。残っているのは海外からの留学生ばかり。アフリカ諸国、アラブ、ベトナム、カンボジア、朝鮮。6ヶ所ある学生食堂も、この時期には1ヶ所しか開かれず、当然、毎日同じ連中と顔を合わす事になる。別段、話す事もないのだが、目を合わすと、「なんだ、お前も未だ残っていたのか」と言いたげな表情。

この休暇が始まる前の週末、美術学校の彫刻科の学生は2年に一度の大きな展覧会を開いた。僕も及ばずながら出品したのだが、こちらの学生の発想の豊かさ、自由さに少なからず驚かされた。石膏、木材、粘土、紙、ポリエステル樹脂等を用い、特異な非日常的空間を現出させることを目指している。一般に、日本の学生より完成度は低い、素材を熟知する事よりも発想を先行させている。そんな考え方は、日本で工芸を専攻していた僕にとって或意味で新鮮であった。フランス人は、よくしゃべる。殊に、展覧会のような場になると教授と喧嘩で討論している学生の姿がよく見られた。展覧会の撤出が終わった日から休暇。カー一杯の仕事をし、後は思いっきり遊ぶ。どうもそんな事らしい。

僕がナンシーに来て、既に半年になる。その半年の間の事を様々に思い出しながら、花と緑の美しい公園を通り過ぎた。暖かくなり出した春の風に誘われて、明日は郊外へピクニックにでも行こうと頭の一方のはしっこで考えながら。

金沢で学ぶ私

東南アジア留学生 アリフ・マウラニ
(インドネシア)



私が初めて金沢へ来たのは、4年前の秋のことでした。私の出身地/バンドンは、年中20~26度の気温、海拔770m、バンドン高原に位置しているため、私は、その時の金沢の紅葉した秋の風景そして後にはその春の風景にもすっかり心を奪われてしまいました。

現在、光栄にも私は、金沢大学へ通って、金沢市東南アジア留学生受入制度によって金沢市のお世話になっております。ここに住みついてから東京に居た頃より多くの人情に触れることができることは、それなりに印象的です。そして、これだけ長い年月を過ごしている間には、勿論色々なことがありました。沢山の方々に力になって戴いたり、その反面、多数の方々とぶつかったりしては笑われたり言われたり、私の方も怒ったりして、いやになったこともないことはないのです。が、今やそれらの経験は私の勉強にもなる訳で、良かったとさえ思うようになって、こうして今日までやって参りました。だが勿論、それだけの理由はありません。先ず私は、この制度は素晴らしいものと思ひ、受け入れて戴いた以上、自分なりに最後まで頑張りたと思ったからです。特に、この制度の設立が74年東南アジアに起こった「反日運動」に先んじたという事実を考えると、実にこの制度の発案者の偉さ、又、この制度の重大な意味に私は、感心せざるを得ないのです。

さて、私は、金沢を出て行く前に、二つ夢を見たいのです。それは、誰にでもたとえ一言でも、インドネシア語を覚えて戴くことと、もう一つは、金沢とバンドンが姉妹都市になることです。後者のことを耳にされたく、先日、岡市長様はうはうはと笑われたので、どうやらまだ遠い先の夢のようです。しかし、前者のことなら、現在、実は私は、ある人にインドネシア語を教えているのです。教えることは結局は、自分の勉強にもなることなので私も喜んでやっております。

あと一年の留学生生活を一生懸命頑張りたと思っておりますので、どなたからも温かい御指導と御支援をお願いしたいものです。

プロフィール



グレイス・M・ロバートソンさん
(北陸学院小学校長)

ウイスコンシン州ベロイット市生まれ。
S. 32年 United Church of Christ 教団から派遣され金沢へ。以後、北陸学院女子短大教授。宗教教育専攻。
S. 52年、北陸学院小学校長。

昨年、小学生による英語劇を発表し、注目された北陸学院小学校の校長先生。全校児童95名。劇に参加したほとんどの児童が今でも劇中の会話を覚えているという。「英語は、耳と口で学ぶもの。読み書きは、その後でも良い」との信念を実証した。「日本の子供達は、他人が赤いカバンを持つとみんなが持ちたがる」と個性のなさを指摘する。「自分で考え、自分の責任で行動すること」が同校の教育方針。裏山のワラビを採り、それを親や近所の人達に買ってもらい、修学旅行の費用の一部を子供達の力で捻出させたりするなど筋のある教育が行われている。途中、6年間帰国していたこともあるが、金沢に住んで21年。「金沢は大好き。特に、油車、横山町、東山あたりの狭い路地や古い家並が好き。でも、近年古いものが壊され、金沢のユニークさが失われていくのが残念」と語る言葉には実感がこもる。国際交流で大切なことは？「相手国の文化を学び、理解すること」、「それには民泊が最良。団体旅行は、日本人だけがかたまりがちで本当の交流が望めない」と語る。

現在、短大で宗教教育をも教えており、多忙な毎日。人間にとって仕合わせなこととは？「他人のために何かをできること」「神があれば、小さなことでも仕合わせに感じる」と目を細め、やさしそうに語る。趣味は、幅広く、卒業記念アルバムの一部を自分で写したりする程の写真愛好家でもある。あと3年で引退予定、国には兄2人、妹1人が結婚して暮らしている。独身。市内三小牛町在住。

○ナンシー日仏協会会長ピエールソン博士逝去



ナンシー日仏協会会長ベルナルド・ピエールソン博士(56才) =写真が3月11日、肺ガンのため逝去した。ピエールソン博士は、昭和47年にナンシーと金沢が姉妹都市提携を結んだ時の原動力となった人で、これまで3度金沢を訪問したことがある。又、過去、数多くのグループが本市からナンシーを訪れたが、こうしたグループを温かく受け入れるなど、その温厚な人柄は、だれからも親しまれ、愛されていた。提携の数年前に既にナンシー日仏協会を創立し、ナンシー在住の日本人との交流を通して友好をはかっていた。提携後、こうした活動が金沢の関係者の心を動かし、本市にも金沢日仏協会が発足するに至った。

日本を、とりわけ金沢をこよなく愛した同博士は、金沢の古い歴史、伝統・文化に強い関心を持っていた。ある意味において日本人以上に日本人な人でもあったが、それは、内面的なものをも含めて日本文化を正しく理解していたためであろう。それだけに、同博士の逝去は、本市内の関係者から惜しまれている。14日のナンシーの大聖堂での盛大な葬儀には、ナンシー在住の日本人のほとんどが列席し、最後の別れを悲しんだと伝えられている。

ミニ・レポート

○フランスの女優が来訪

フランスの舞台女優アンヌ・マリ・フィリップさん(23才)が1月17日から24日まで本市を訪問した。フィリップさんは、「赤と黒」、「夜の騎士道」などで有名な往年のフランスの二枚目スターであったジェラルド・フィリップの実娘。フィリップさんは、映画の出演交渉の打ち合わせのため来日し、知人から日本の伝統文化が残っている金沢を紹介され訪れたもの。18日、岡市長を表敬訪問し、楽しく歓談した。昔の映画の本を見せたところ「父は偉大な俳優だった。でも父は父。私は私」とあまり父親の話に興味がない様子だったが、市長から「七転び八起き、頑張ってください」と起き上がりダルマをプレゼントされ大喜びだった。そのあと、金沢日仏協会の集いにも出席し、友好を深めた。又、兼六園、加賀友禅、九谷焼工場などを訪れ、とりわけ友禅の絵付けの優雅な美しさに見とれていた。24日に離別したが、本市滞在中は寺町の石田さん宅に宿泊していた。



○市義勇消防団が6月にバファロ訪問予定

本市の義勇消防団の有志30人が6月1日、姉妹都市バファロで全国的に知られる「加賀鷲」の演技を披露する。団長は、油谷本市提携委員会名誉会長で、団員は、連日ハシゴ乗りの練習に余念がない。一行は、2泊3日の予定でバファロに滞在するが、ハッピ、マトイ、ハシゴ等はすべてバファロへ寄贈される。同市では加賀鷲コーナーを設け、広く市民に紹介する計画が進められており、一行の訪問は、両姉妹都市の友好促進に貢献するものと期待されている。

○ポルトアレグレへ寄贈の植物を検討中

ブラジルの在ポルトアレグレ日本総領事館から本市在住の釜谷氏(2年前にボ市を訪問)を通して、「あやめ」類を姉妹都市ポルトアレグレへ寄贈してはどうかとの打診があった。それによると、ポルトアレグレ市近郊は、湿原が多く、水性植物の栽培に適しており、一面に花が咲けば観光PRにもなりそうとのこと。本市では、桜の苗木を贈る計画でいたが、現地の環境に合った植物が最良との見解に基づき、現在、ポルトアレグレ市当局の意向を確認中である。

○東南アジア留学生ハリ君が帰国

昭和51年に本市の東南アジア留学生受入制度の適用者となった金沢美術工芸大学の油絵科聴講生、ハリ・ダルソノ君(インドネシア)が2年間の留学を終え、4月中旬に帰国した。同君は、留学中、2年連続、二科展に入選し、市内のテパートで個展を開くなど、その活躍は目ざましかった。3月18日、岡市長を訪問し、「人形」と題する油絵を寄贈し、留学中の楽しい思い出を語った。市長からも自筆の色紙を贈られ、留学無事修了の喜びをかみしめていた。

○編集後記

春は、美しい。遠くに霞む山並や、柔らかな日ざしに包まれてふくらむ花のつぼみなどを見ていると一層、その感を深める。

先日、ある人から嬉しい話を聞いた。2年前に泊めたゲントの青年との間に温かい文通が続いているということだった。目立たないが、すばらしい市民交流だと思った。

春にふさわしい話であるように思えた。